

आयूस: あーゆす

〈発行〉 京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足 80

◎◎◎◎◎ エントロピーと食生活 ◎◎◎◎◎

図書館長・教授 末次 信行

ある書物との出会いが、その後の記憶のどこかに残っていることがある。そのような書物の内の一冊が『エントロピーの法則—21世紀文明観の基礎—』（ジェレミー・リフキン著、竹内均訳、祥伝社）である。

エントロピーの法則というのは、熱力学の第二法則であり、物質とエネルギーは一つの方向のみに、すなわち使用可能なものから使用不可能なものへ、あるいは、秩序化されたものから無秩序化されたものへと変化すると表されている。第一の法則は宇宙における物質とエネルギーの総和は一定というエネルギー保存の法則である。熱力学の法則に出会ったのは大学2回生の頃であった。何となく分かったような、分からないようなままに、かなりの年月が過ぎてからこの著書にめぐり合ったのである。そして、その後エントロピーについての多種類の解説書が発刊される契機となっただけに忘れられない1冊となったわけである。

著者はエントロピーの法則を裏付けにして、「あらゆるテクノロジーは環境をより無秩序にする」、「新技術は、必ず以前より悲惨な副作用をもたらす」、「自然の生産を上まわりすぎる消費は恐怖である」、「エネルギーは有限であり、社会の進歩も永遠ではない」などの論説をもって20世紀社会の問題点を指摘している。これらを総括して、20世紀社会は物質的な豊かさを生み出し、あらゆる人間的な欲望を満たすため

に、より高いエントロピーの流れ（物質的進歩、能率、専門分化など）を重視した、無秩序な高エントロピー社会であり、21世紀では「より少ないことは、より豊かなことだ」という言葉で表される文明観に基づいた低エントロピー社会へ移行する必要性を論じている。

人類が21世紀に食べていけるかどうかという食料需給を考えてみると、毎年、約1億の人口増に見合う食料生産が可能なのか先行きが見えてこないし、先進諸国の食生活の有りようがその可能性に大きく関わっていることはいうまでもない。食品産業が膨大なエネルギーを消費する大産業になり、それともなって食生活の多様化という様相が現れた。輸入食品、加工食品、冷凍食品、インスタント食品、ファーストフード、外食・中食・内食など、何をどのようにして食べるかということに、ありとあらゆる自由な選択ができる高エントロピーな食生活になっているのである。

今年、6月に食育基本法が制定され、「食事バランスガイド」として食事の望ましい組み合わせやおおよその量がわかりやすくイラストされるようになった。このガイドラインと自分のとっている食事の内容を比較して何が不足しているのか、何を摂りすぎているのかを知ることですれ少くも低エントロピーな食生活、いわゆる健全な食生活が営めるようになりたいものである。

***** ひとつのいのちから *****

助教授 小 河 尚 子 (言語人類学)

今年の2月中旬、アメリカ・ポートランド市のオレゴン動物愛護協会から一通の手紙が届いた。それは「このたび、あなたの愛犬スパッドがお亡くなりになったことに心からお悔やみを申し上げます」という丁寧なお悔やみの書き出しだった。いくつかの動物保護・愛護団体の会員である私のところに、毎年、会費更新案内や他の関連団体から案内が届く。しかし、アメリカのポートランドの愛護団体から、またなんど思いながら適当に読んでいくと、「この度、多額の寄付をいただき…」とある。ますます訳が分からなくなり、再度読み進める。

「昨年(1997)の11月11日に亡くなられた愛犬スパッドのご冥福を心からお祈りいたします。スパッドへの追悼として、本協会の会員であり熱心な支援者でもあるR.フリントさんから多額の寄付を頂戴しましたのでお伝えいたします…愛犬スパッドの死によせられるR.フリントさんからの温かいお志は、他の多くの仲間のいのちの一部となりました」と続く。

フリントさんはポートランドの北にあるセント・ヘレンズという小さな町に住んでいる女性で2年ほど前に動物愛護関係の調査でアメリカの友人を通じて知り合った。昨年(1997)の私の愛犬スパッドの死を最初に伝えたとき、電話の向こうでしばらく無言が続いた後、「スパッドは『虹の橋*』にいったのね」といってくれたその人だ。

彼女の大邸宅には、現在、3匹の犬と5匹の猫がいる。昨年(1997)のクリスマスに彼女を訪れたときにいた愛犬デージー、クリケットの2匹も今は「虹の橋」にいる。デージーは亡くなる前の半年間は悪性腫瘍のためポートランドにある動物病院で放射線治療を受けていたが、最後は安楽死させたそうだ。クリケットは老衰。この2匹も、そして現在いる3匹も、そしてその前にいたほぼすべてのアニマル・コンパニオン(伴侶動物)は全員ポートランドの動物愛護協会から養子としてフリント家に迎えられた。雨の日にけがをして庭に入り込んだアナグマ、ドライブ中の車のまえに飛び出してきた迷い犬を除いては。

その広い家にはアニマル・コンパニオンの存在がしっかりとそしてさりげなく感じられるものがある。オレゴンの州木ダグラス・ファー(米松)に囲まれた広大な裏庭には北米で子供のいる家庭の庭によく見られるミニフィールドアスレチックスのようなものがあるし、さらに庭に面した一部屋は雨天運動場。その裏庭の片隅に何本もの風車がくるくる回っている小山がある。そこはフリントさんが十年ほど前にセントヘレンズに引っ越してきてから亡くなったヒト以外の家族が眠る場所である。大小の御影石の墓石があり、かわいいアナグマ、ウサギ、ネコの形をしたものや様々な形の平たい墓石もある。それぞれに名前、亡くなった年月日とちょっとした墓碑銘が彫ってある。このように書いていくと最近日本でもよく話題になるペットブーム最前線の内容になってしまいそうだ。

フリントさんはいきもの大好きな家庭に生まれ、いきもの大好き実業家フリント氏と結婚、二人の息子と一人娘に恵まれ、常にたくさんのアニマル・コンパニオンに囲まれていた。しかし、10数年前に長男と夫を相次いで亡くしている。深い悲しみにあった彼女は夫と余生を過ごす場所として夫が亡くなる直前に選んでいた今の場所に引っ越した。以前から夫と動物愛護活動に携わってきた彼女は、次から次へとアニマル・コンパニオンを迎え、そして見送ってきた。失ったいのちはまた別のあたらしいのちとなって彼女にむかえられてきた。それらはすべて一度は失われかけたいのちばかりである。

私の愛犬スパッドは彼の生まれ故郷のオレゴンで救われた犬たちの中に生き続ける。そして彼の生涯の半分以上を過ごした日本でも、あたらしく我が家に迎える成犬3匹のなかで彼は生き続ける。そして、「虹の橋」では私を待っている。

*「天国の一步手前に『虹の橋』と呼ばれる場所がある…」で始まる作者不明の寓話「Rainbow Bridge」

*** 私のすすめる3冊 ***

教授 照屋敏勝 (幼児教育学)

「動物」、「植物」、「人間」に関する啓蒙書をそれぞれ1冊ずつおすすめします。

1. 『ゾウの時間ネズミの時間：サイズの生物学』

本川達雄 著／中央公論社

大変すぐれた啓蒙書である。サイズというキーワードで動物の特性が解明されている。人間はエネルギーの消費量からすると、巨象に相当するという。人間がいかにアンバランスで、特化し、肥大化した動物かということがよくわかる。

本川先生のご専門は動物生理学であり、琉球大学にもおられたので、『サンゴ礁の生物たち』（中公新書）というご著書もある。

2. 『ふしぎの植物学：身近な緑の知恵と仕事』

田中 修 著／中央公論社

動物も植物も「不思議!？」に満ちている。そのふしぎをすることはたいへんきょうみぶかいことである。保育や教育も植物学からたくさん概念を借用している。「成長」、「めばえ」、「すくすく」、「根ざす」、「結果」など多くの植物モデルの概念が使われている。田中先生のご専門は植物生理学である。先生の講義を一度拝聴したことがあります。示唆的で、触発されるものが多かった。

3. 『豊かさの精神病理』

大平 健 著／岩波新書

豊かさ過剰になると、マイナスに作用する。豊かさのもたらす精神病理が多様な実例で紹介され、分析されている。モノについて際限なく語る「モノ語り」の人々が多数登場する。ボーナスが出るたびにヨーロッパにブランドものを買出しにでかけるOLの話などおどろきである。モノによって自信をつけた人はモノによって自信がおびやかされる。大平先生は精神科医である。

ルバイヤート

この万象の海ほど不思議なものはない、
誰ひとりそのみなもとをつきとめた人はない。
あてずっぽうにめいめい勝手なことは言ったが、
真相を明らかにすることは誰にも出来ない。

*

一滴の水だったものは海に注ぐ。
一握の塵だったものは土にかえる。
この世に来てまた立ち去るお前の姿は
一匹の蠅——風とともに来て風とともに去る。

*

君も、われも、やがて身と魂が分れよう。
塚の上には一基ずつの瓦が立とう。
そしてまたわれらの骨が朽ちたころ、
その土で新しい塚の瓦が焼かれよう。

『ルバイヤート』オマル・ハイヤーム(岩波書店)

小川 亮作 訳

※ オマル・ハイヤーム(一)(四八―一三三)はペルシアの詩人、
科学者。ハイヤームの「ルバイヤート(四行詩集)」は、イギリ
スの詩人フィッツジェラルドの英訳によって世界に知られた。



『まどガラスとさかな』を読んで



初等教育専攻2回生 堀 由 貴

少し時間ができると時折、近くにある本を読むほど、私はあまり読書好きではありません。本の中の不思議な世界に触れることは大好きですが、難しい言葉や言い方などに出くわすと、つい読むことが嫌になってしまうのです。でもこの『まどガラスとさかな』はそんな私でも十分理解することができる話でした。これは小学校の教育実習に行った時、道徳教材としてあつかった作品です。指導する私自身が理解できず興味も持てないような話では授業はなりたちません。教材にこの作品を選んだということは、その内容が私にとって非常に印象に残る話だったと言えます。

この話は主人公が遊んでいて窓ガラスを割ってしまったことから始まります。初めはそのことを隠していた主人公の気持ちの変化や不安が分かりやすく表現されていて、過去の自分の失敗や行いを考えさせられる話でした。人なら誰でも、生きていく中で怒られることが怖いとかあやまるのはめんどくさいなどの理由で、自分の失敗を隠そうとした経験が一度ぐらいはあるでしょう。私は今までに何度もそんな経験をしてきました。ピアノの先生が怖くて練習不足の日は教本をピアノの下に隠してみたり、給食の食器を不安定な場所に置いたためにそれが落ちても、まるで自分に関係がなかったようにその様子を傍観していたりしたことがありました。それ以外にも、同じようなことはいくらでも思い出せます。とにかく、幼い頃の私は、自分を守ることに必死になっていたと思います。そのために二つ下の妹に嘘をつかせたこともありました。総ての人が私のようなとは言いませんが、同じような思いを抱いた記憶のある人はいるでしょう。

私は「鉄砲玉のような子」だと言われるほど、じっとしていることが苦手な子でした。新しいことが大好きでその上負けず嫌い、自分の能力を考えずに遊ぶから、常に生傷だらけになって帰ってくる日々でした。妹はそんな私とは対照的で、とにかく危険がありそうなどころには行かない、危ない事はしない、「おとなしい」と呼ばれる女の子でした。だから、私と妹が近所の子も含めみんなと一緒に遊ぶ時、妹は「梅干し」という鬼ごっこでタッチされても、決して鬼にはならない役に自然になっていました。今思えば、本気で鬼に追いかけてられない役についてしまった妹が楽しめたかは疑問ですが、妹は楽しそ

うでした。妹にとっては怖いはずのスケートボードも、私がしているのを見てやりたいと言い出しました。でも妹には無理だと感じた私は、妹を前に乗せ、後ろから自分が妹を支えて滑ることにしました。滑り始めると想像以上にスピードが出て、私は妹を支えていた手を離してしまったのです。言うまでもなく、前に飛んでいった妹は体中ケガをしてしまいました。それを見た私は泣きじゃくる妹に向かって「お母さんには自分でこけたことにして」って言ったのです。本当にひどい姉だったと思います。ただ母に怒られることが怖くて、妹より自分のことを考えてしまいました。でも妹はそんな私の妹だとは思えないくらい優しい子で、家に帰ると私の言ったとおり母に向かって「坂でこけた」と報告しました。妹のその姿に自分が恥ずかしくなった私は泣き出してしまい、結局母には全てがバレ、嘘をついたことを延々と怒られることになりました。同じ嘘でも、自分を守るために私がついた嘘と妹の嘘は違います。私を守るために妹がついてくれた嘘に、私はうれしくも情けなくもなりました。この作品を読みながら、私は、そんなことを思い出し、懐かしい気持ちになっていました。

『まどガラスとさかな』タイトルだけでは、内容がよく分からないとは思いますが、幼い頃の私のように、自分を守ることを第一に考えてしまっている自分に気づいたとき、この話は強くこころに響くものがあります。『まどガラスとさかな』は、自分のことを考えさせられる作品です。実習先の小学生もこの話を聞き、過去の自分を思いだしたのか、教壇に立つ私に向かって「先生最後まで隠し通せたら怒られへんし、その方がいい。」と半分泣き声で訴えてきたほどです。

この作品は、自分の失敗を隠す方がいいのか悪いのか、正直者がいいのか悪いのか、はっきり答えをだすことを求めている話ではなく、読んで自分の行動を考えることを求めている作品だと思います。この作品を読んだ総ての人が、話の内容を気に入るか気に入らないかは分かりませんが、自分の行動を恥じるか恥じないか、行動している自分が好きか好きではないか、そのことを考えるきっかけに必ずなる話です。

奈街 三郎 作

『日本幼年童話全集 第5巻』(河出書房)